

ボードレールと「オンナノセカイ」

著者	小山 尚之
雑誌名	東京海洋大学研究報告
巻	8
ページ	19-33
発行年	2012-02-29
URL	http://id.nii.ac.jp/1342/00000438/

ボードレールと「オンナノセカイ」

小山 尚之*

(Accepted October 24, 2011)

Baudelaire and “mundi muliebris” (Feminine World)

Naoyuki KOYAMA*

Abstract: The object of this article is to trace and analyse the vacillating mode of Baudelaire's self between ecstasy and horror in the feminine world. For Baudelaire, who finds in the form of androgyny an idealistic model of an artist, emanations from women have a reversibility that restores his inner health. He scatters his self in the feminine world. But endlessness of women's desire terrifies him. He discovers signs of evil in natural desires of women and combines desire for sex with that for destruction. Love is, for Baudelaire, like a surgical operation or a duel in which he feels fear of losing his essence. As a dandy, he tries to concentrate his self. To moderate provocative presence of women's flesh, Baudelaire wants to frame woman with jewelry or landscape. Or he sublimates women's presence into memory or spiritual being. But Baudelaire never stops wavering between ecstasy and horror in the feminine world.

Key words: Baudelaire, feminine world, natural desire, ecstasy, horror, scattering self, concentration of self

序

ボードレールの恋愛詩に関する注釈と解説はこれまでに夥しいほどなされてきている。特に、彼の3人のミュージズ、ジャンヌ・デュヴァル、サバチエ夫人、マリ・ドーブランについては個別に精緻な研究がおこなわれている。

しかし伝記的な事実や個別の事例を超えて、また各詩編の源泉や修辞上の分析を超えて、ボードレールの世界における女性の位置をトータルに論じたものは筆者はあまり目にすることがない。大まかに、ボードレールにおいてはジャンヌに代表される肉欲の世界があり、サバチエ夫人に捧げられたものにはプラトニックな愛がある、といった二元論が確認される程度にとどまっているように思われる。

本稿は、ジャンヌ・デュヴァル、サバチエ夫人、マリ・ドーブランといった固有名を離れ、また伝記的な事実もある程度捨象して、テキストとして見た場合のボードレールの世界において、女性はどのように表象され、また価値づけられているのかを全体的に俯瞰し跡付けてみることを目的とするものである。その際、ジョルジュ・ブランの『ボードレールのサディズム』(Georges Blin, *Le Sadisme de Baudelaire*, José Corti, 1948) と、レオ・ベルサーニの『ボードレールとフロイト』(Leo Bersani, *Baudelaire and Freud*, University of California Press, 1977) が非常に参考になったことをあらかじめ断っておきたい。

ところでボードレールの世界が二元論的なもので出来上

がっていることは、少しでもその世界を垣間みたことのある者なら容易に確認できる事実であろう。だが、その二元性をボードレールの次の言葉で解釈することを筆者は採択しなかった。「どんな人間にも、どんな時にも、二つの祈願が同時であって、一つは神に向かい、一つはサタンに向かう。神への祈願、あるいは精神性は、向上への希求である。サタンへの祈願、あるいは動物性は、下降の喜びである。女への愛や、動物、犬や猫などと親しむのは後者に属する」(Mon cœur mis à nu, t.I, p.682-683)。なぜならこれらの言葉が、まず第一に、非常に宗教的で超越的な二元論を導入しているからである。ところがボードレールの世界における宗教的な要素は、ほとんどの場合、女性にたいする肉感的欲望を偽装するために用いられているのである。そして第二に、これらの言葉は女性にたいする愛をすべてサタンへの祈願のうちに含めているからである。筆者は女性にたいする愛をサタンへの祈願であるとは見做さない。

筆者はボードレールの女性にたいする二元性をより内在的で有限性の地平で解釈しようと考えた。その際いつも念頭に浮かべていたのはボードレールの以下のフレーズである。「《自我》の拡散と集中について。そこにすべてがある」(Mon cœur mis à nu, t.I, p.676)。あるいは、「極く幼い頃から、私は心のうちに相反する二つの感情を抱いていた。生の恐怖と生の恍惚と」(ibid., p.703) である。自我の「拡散」と「集中」、あるいは生の「恐怖」と「恍惚」、こういった二元性の見取り図の上に立って、筆者はボードレールの世界に

* Department of Marine Policy and Culture, Faculty of Marine Science, Tokyo University of Marine Science and Technology, 4-5-7 Konan, Minato-ku, Tokyo 108-8477, Japan (東京海洋大学海洋科学部海洋政策文化学科)

おける女性性について考察したことを最初に述べておかなければならないであろう。

ボードレールからの引用はすべて以下のテキストに拠る。

Œuvres complètes de Baudelaire, texte établi, présenté et annoté par Claude Pichois, bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, tome I 1975, tome II 1976 (t.I,t.II, と略す).

Correspondance de Baudelaire, texte établi, présenté et annoté par Claude Pichois avec la collaboration de Jean Ziegler, bibliothèque de la pléiade, Gallimard, tome I, II, 1973 (Cor. I, Cor. II, と略す).

また日本語訳に関しては、『ボードレール全集 I-IV』、福永武彦編集、人文書院、1963-64 年を随時参照したが、最終的には本稿におけるボードレールの日本語訳すべては筆者の任意で翻訳したものであると了解していただきたい。

1. 「アンドロギノス」 androgyne の夢

『人工の楽園』の中でボードレールは述べている。気質においても精神的な能力においても全く同等な男性 2 人を仮定した場合、「オンナノセカイ」"mundi muliebris" (t.I, p.499)、すなわち、女性の腕や胸、膝、髪の毛の匂い、衣服の輝きや手触りなどによって形作られる世界に、湯浴みしたことのある男性の方が、まるでそのような環境に無縁であった男性よりも、芸術家としては一段すぐれている、と。「オンナノセカイ」に生まれた男性は、そこで、「繊細な皮膚と、上品な調子と、一種のアンドロギノス性」(une délicatesse d'épiderme et une distinction d'accent, une espèce d'androgynéité, *ibid.*) を身につける。「それなくば、最も激しい最も男性的な天才と言えども、芸術における完璧に関して言えば、不完全な存在のままである」(*ibid.*)。

このアンドロギノス(男女両性具有)というのは若き頃からのボードレールの理想でもあった。1846 年(ボードレール 25 歳)のはじめ頃に制作されたと思われる『ラ・ファンファルロ』*La Fanfarlo* という小説のなかで、ボードレールは、小説中の主人公であり彼自身の分身とも思われるサミュエル・クラメールを、「現代の両性具有の神」"dieu moderne et hermaphrodite" (t.I, p.553) と呼んでいる。すでにバルザックの小説『セラフィタ』(1835 年)において、セラフィタ=セラフィトウスという男女両性具有の登場人物があり、おそらくボードレールもこの作品を読んでいたであろう。またジャン・カスーの『1848 年』という著作によれば、1840 年頃、ジャン=シモン・ガノーという新興宗教の教祖が、みずからを「マパ」(すなわちママとパパの合体語)と称え、両性の完全平等、男性原理と女性原理の合一を唱えていた¹⁾。

ガノーという教祖は当時パリのサン・ルイ島に住んでいたが、ボードレールも 1842 年 4 月から 1844 年前半まで、サン・ルイ島に居を構えていた。G. ブランは、ボードレール

とガノーが接触した可能性を否定していない。「彼(ボードレール)が、マパ・グループの何人かの加盟者や活動家の交霊術師たちと出会うこともあり得たと想定はできる²⁾」。

プラトンの昔からのアンドロギノスの夢は、ボードレールの時代、小説や新興宗教のかたちで、ボードレールの周囲に漂っていたと言える。そしてボードレールも、男女両性具有という形態に、芸術家の理想像を見出していたのである。

2. 「功德」 réversibilité

男性を男女両性具有の存在にするには、「オンナノセカイ」に浸る必要がある。そこには女性から発散されるさまざまなものがある。そしてこの「女性からの発散物」*émanations de la femme* は、ボードレールによれば、ある種の「功德」を持っているのである。

「功德」と訳したフランス語の *réversibilité* をより正確に訳すと「可逆的な功德」とも訳されよう。「可逆的な功德」とは、もともとカトリック神学のなかで用いられている神学的な概念である。それはパウロの『ローマびとへの書簡』第 5 章 15 節に表明されている。まず否定的な意味では、一人の人間の犯した過ちや罪は、時代の流れのなかで不可逆的に孤立しているのではなく、その後の人類全員に可逆的に波及するとされる。たとえばアダムの罪やカインの罪はいまを生きているわれわれにも波及している。しかし肯定的な意味では、罪なき聖人の犠牲と苦しみ、何よりもイエス・キリストの犠牲は可逆的に全人類の罪を贖うとされている³⁾。この場合、犠牲となるひとが無垢であり穢れなき義人であればあるほど、その功德の力は増すという。

しかし『聖書』に記述されている「功德」は霊的なものばかりではない。その「功德」は身体的な場合もある。たとえば、『旧約聖書』列王紀上の第 1 章には次のような記述がある。ダヴィデはひどく衰弱していた。それをみた彼の臣下は、シュナミ人アビシヤグという美しい処女を王の寝台に伴に臥させた。アビシヤグの健康な身体が弱まったダヴィデの身体を可逆的に蘇生させるかもしれないと考えてのことだ。しかし王はついにこの女と交わらなかったとある。

ボードレールは以上の『旧約』に描かれたダヴィデにみずからをなぞらえる。そして『旧約』に書かれていたこととは反対に、ボードレール=ダヴィデはむしろ「女性からの発散物」を食欲に求め、不毛な停滞から解放されることを切に願うのである。それがボードレールが女性に求める「可逆的な功德」なのである。

瀕死のダヴィデ王も健康を求めたことであろう

お前の魔法の身体が放つ発散物に

「功德」 Réversibilité, t.I, p.45

ボードレールは、「女性からの発散物」の「可逆的な功德」に、宗教的な救済ではなく、芸術的な完璧さのための補助、あるいは、人間的な健康の回復を求めることになるのである。

お前のおかげで病癒えた我が魂、
お前のおかげで、光と色彩よ！
我が暗黒のシベリアでの
熱の爆発よ！

「午後の歌」Chanson d'après-midi, t.I, p.60

女性から発散される「光」「色彩」「熱」といった「発散物」は、詩人における「暗黒のシベリア」を溶解させ、再生させる力を持っている。この「発散物」のおかげで、詩人はより完璧な芸術家へと変貌をとげ、さらなる健康を回復していく。

3. 「女性からの発散物」*émanations de la femme*

それでは「女性からの発散物」にボードレールが癒されていく様を個々に見ていくことにしよう。

まず女性の「声」は、「最も暗い私の身の奥底に、真珠の珠とまろび落ち、染み透り」(Le Chat, t.I, p.50)、さらに、「媚薬のように私をうっとりさせる」(ibid.)。また、J.-P. リシャールに倣って言うならば、女性の「身体の多孔性⁴⁾」を通して発散される「血」という発散物、この生命の躍動そのものを象徴するものを、ボードレールは吸い込む。「お前の方へ身を傾けたとき、(…)僕はお前の血の薫りを吸う心地がした」(Le Balcon, t.I, p.37)。さらに女性の「眼」、この「魂の採光換気窓」(Sed non satiata, t.I, p.28)は、彼にとって「僕の倦怠が渴きを癒す貯水池」(ibid.)である。

さらにボードレールは、女性の眼差しから放たれる「光」にも詩人を腐敗や墮落から救出する「功德」を見いだす。女性の眼差しは、「生きた松明」(Le flambeau vivant, t.I, p.43)であり、「光に満ち」(ibid.)、詩人の「以前萎れていた心」(XLII, t.I, p.43)を、「再び花開かせ」(ibid.)、「愚かな乱痴気騒ぎの煙ただよう残骸」(L'Aube spirituelle, t.I, p.46)の上から詩人を「美の道へと導く」(Le Flambeau vivant, ibid.)。

ボードレールの感覚は、女性の肉体から発散されるものに恍惚としてゆく。彼は、女性の「両の肩から光のように迸る健康」(A celle qui est trop gaie, t.I, p.156)に目も眩む思いをし、女性の肌の変幻自在な輝きを賞味する。「何と僕は好むことだろう(…)／お前の大変きれいな肉体が／ゆらゆらそよぐ布地のように／肌をきらめかすさまを見ることを」(Le Serpent qui danse, t.I, p.29)。そして、女性の肉体の輝きと動きに恍惚となるにつれ、ボードレールの内面的な主体性も、女性の肉体の動きに応じて「拡散」しはじめるのである。

その腕、その脚、その太腿も、その腰も

油のように滑らかに、白鳥のようにくねくねと、
明るく冴えて晴朗な私の眼の前をよぎるのだった。

「装身具」

Et son bras et sa jambe, et sa cuisse et ses reins,
Polis comme de l'huile, onduleux comme un cygne,
Passaient devant mes yeux clairvoyants et sereins ;

Les Bijoux, t.I, p.158

上の詩句に見られる接続詞 *et* の多用は、詩句の息づかいを細かく分割することによって、詩人の内面的興奮を露わにしていると言えるだろう。また R.-B. シェリックスによれば、上に掲げた詩句のうち、「油のように滑らかに、白鳥のようにくねくねと」*Polis comme de l'huile, onduleux comme un cygne* という行における l の豊韻法、またこの流音の l と明るい母音 *i, ui, eu* との衝突は、艶やかでよく動く肉体の感覚そのものを生みだしているという⁵⁾。

その腹、その乳房、わが葡萄の房であるその乳房は、
悪の「天使」らも及ばぬほど甘たれて近づいてきた、
わが魂の座を占めていた安息を乱そうとして。

同上 *ibid.*

女性の腕、脚、太腿、腰、腹、乳房へと、部分部分に流れていく詩人の換喩的な視線の動きは、詩人の自我という殻から抜け出さんばかりの、詩人の欲望の運動をあらわしている。「自我の拡散」である。L. ベルサーニは述べている。「ボードレールにとって女性は、欲望を満たすために存在するのではなく、欲望を生みだすために存在している⁶⁾」。つまりここには肉体の舞踏があるのであり、暗黒のシベリアで疲弊していた詩人の魂も、この舞踏につられて外にできるようにしている。そして、この肉体の舞踏に恍惚とする詩人の欲望は、女性の肉体の表面にさらに拡散していく。

……………わが「欲望」、わななき、
波打つ、わが「欲望」は、登るかと思えば降り、
頂きではバランスをとって揺れ、谷間では静かに憩い、
ただひとつの接吻で、お前の白く薔薇色の肉体すべて
を覆いつくす。

「あるマドンナに」A une Madone, t.I, p.58

ボードレールの欲望、あるいは自我は、「オンナノセカイ」から発せられる響きや光、熱、色彩、運動などによって、「オンナノセカイ」の中に拡散していく。ところで、女性から発散されるものでより直接的にボードレールに触れるものがある。「唾液」*salive* である。

うなる氷河の溶解によって
水かさの増した波のように
お前の口の水が、お前の歯の岸辺に

満ち寄せるとき、

僕は飲む心地がする、苦く、
勝ち誇るボヘミアの酒を、
液状の空を、それは鏝める
僕の心に星を！

「踊る蛇」 *Le Serpent qui danse*, t.I, p.30

恋人の唾液は、詩人の内奥に染み入って、広大な宇宙空間を詩人の心のなかに開花させる。唾液という、生々しくむきだしの実質は、溶けてうなる氷河、ボヘミアの酒、液状の空に比較されることで、その生々しさを緩和している。

だが、詩人の「明るく冴えて晴朗な眼」は、このような欲望の動きにいつまでも耐えていられるのであろうか？というのも、女性から発せられる魅惑は、「悪の《天使》らも及ばぬほど甘ったれて」と形容されているからである。さらにその唾液は、「苦く、勝ち誇」っている。つまり詩人は打ち負かされてしまうのだ。そして先まわりをしておけば、実はボードレールは、女性からの発散物に魅惑されると同時に「恐怖」を抱くようになるのである。

しかし先を続けよう。ボードレールにとって、女性からの発散物は、肉体的で官能的な魅力を有するだけではない。それらは詩人の内面的な夢想を喚起する功徳も持っているのである。「お前の瞳、微笑み、脚は、私が愛しこそすれ、かつて知ったことのない《無限》の扉を私にひらく」(*Hymne à la beauté*, t.I, p.25)。無限への嗜好を聖痕としてもつ詩人にとって、無限への扉となるのも女性なのである。そして無限の眼からみれば、現世はなんでもないものと化す。「お前は世界の醜さを和らげ、瞬間の重みを減ずる」(ibid.)。

4. 「薫り」 *le Parfum*

ボードレールにとって女性からの発散物のうちで最も特権的なもの、それは「薫り」である。そして「薫り」は、ボードレールにおいては、しばしば「思い出」と結びついている。たとえば J.-D. ヒューバートは述べている。「薫りは、ボードレールの常に従えば、思い出を象徴している。(…)麝香や香は、薫りとしてよりも、思い出の象徴として重要である⁷⁾」。また J. プレヴォも同じことを述べている。「ボードレールにとって、薫りは、なによりもまず思い出を喚起する手段である⁸⁾」。思い出の世界がこううえなく重要な詩的源泉であることは言うまでもないだろうが、その思い出の世界の扉をひらくものが、女性の薫りなのである。

両の眼を閉じ、…………

お前の熱い乳房の匂いを嗅ぐと、
幸福の岸辺がひろがるの見える

「異国の薫り」 *Parfum exotique*, t.I, p.25

ここでひろがる「幸福の岸辺」は、ボードレールが若いころに経験した南洋航海の思い出の場面である。

ところで、生理的な感覚と記憶の想起を関連づける点で、ボードレールとブルーストのあいだには共通性が認められる。「われわれの過去は、知性の領土の外、その勢力範囲の外で、何か思ってもみなかった物質的な対象の中に（その物質的な対象が与えるであろう感覚の中に）隠されている」(M.Proust, *A la recherche du temps perdu*, bibliothèque de la pléiade, Gallimard, 1954, t.I, p.44) とブルーストは言う。だがブルーストは、このような感覚に出会うか出会わないかは偶然に左右される、と述べる。それが「無意志的な記憶」と呼ばれているわけだが、ボードレールはむしろ意志的な態度のほうを強調する。「僕は知る、幸福な瞬間を喚起する術を」(*Le Balcon*, t.I, p.37)。

しかし、ボードレールの「薫り」「香水壘」などといった詩においては、ブルースト的な「無意志的な記憶」が働いている様態も認められもするのである。「薫り」の注釈において Cl. ピシヨワは、「ここには無意志的な記憶が完璧に作動している」(t.I, p.902) と述べている。「無意志的な記憶」をめぐる議論については、とりあえず L.-J. オースチンの以下の言葉を暫定的な解答として提示しておきたい。

ブルーストよりずっと以前に、ボードレールは思い出が神秘的な護符に結びついていることを知っており、またその護符は、観念と感情と感覚との奇妙な連結によって、われわれの深い感受性に働きかけることも知っていた。ブルーストの無意志的な記憶より前に、ボードレールは、原理においては非常に意志的な、だがその様態においてはさほどでもない記憶を、あれらの連結を練磨することによって実践していた⁹⁾。

いずれにせよ、「薫り」という、女性から発散される発散物は、詩人に記憶のなかの光景を見せる「功徳」を持つわけである。詩人は女性の「匂いに導かれ」、「魅惑の風土」(*Parfum exotique*, t.I, p.25) のさなかへと内的な旅をする。「僕の精神は、お我がが恋人！きみの薫りの上を泳ぐ」(*La Chevelure*, t.I, p.26)。すると「遠い彼方の、不在の、ほとんど死に絶えた世界」(ibid.) が、詩人の思い出のなかで蘇るのである。

5. 「髪」 *la Chevelure*

「髪」という詩において、恋人の髪から発散される薫りは、思い出の世界と同時に、理想境として思いやられる世界をも喚起する。

精気に溢れた樹木も人間も、炎熱の風土のもと、
ながながとぼうっとしているかの地へ僕は行こう。
たくましい編み毛よ、僕を運び去る大波となれ！

きみは、黒檀の海よ、まばゆい夢を内包している、
帆と、漕ぎ手と、長旗と、マストの夢を。

「髪」 La Chevelure, ibid.

女性の「髪」は薫りを発散する「芳香の森」(ibid.)であるばかりでなく、詩人の魂が旅をする「黒檀の海」(ibid.)ともなる。詩人の魂は「恍惚」として、すなわち我を離れて、「芳香の森」でもあり「黒檀の海」でもある女性の「髪」のなかを航海する。この航海が、ギリシャ神話にでてくる「アルゴ船」の航海を彷彿とさせる仕掛けは、「髪」という詩の、冒頭部分にでてくる *toison*「ふさふさした毛」、*moutonnant*「白波たった」、という語の並列から容易に読み取ることができる。*toison* という語は、フランス語においては「金羊毛」*toison d'or* という使い方がなされる。また、*moutonnant* にふくまれる *mouton* は「羊」を意味する。アルゴ船団の船長イアソンとおなじく、ボードレールも、「金羊毛」を求める旅にでるわけである。

『象徴辞典』(Robert Laffont, 1982)によると、「金羊毛」の神話は「理性が不可能であると判断するものの征服を象徴する¹⁰⁾」。たしかに「髪」という詩においては、空間と時間が、通常の理性で考えればあり得ないような変質を蒙っている。

まず空間について見てみよう。詩人と恋人は「アルコーヴ」*alcôve* の中にいる。「アルコーヴ」とは寝台を収めるために壁に穿たれた凹所のことである。つまり「アルコーヴ」は、詩人と恋人を包み込む容器としてある。しかしこの「アルコーヴ」を恋人の髪の中に眠っている思い出で満たそうと、詩人が恋人の髪の毛をハンカチのように振るとき(「髪」第1節)、「アルコーヴ」と詩人の頭蓋のあいだにアナロジーが成立する。なぜなら、恋人の髪の匂いから蘇る思い出が「アルコーヴ」を満たすように、詩人の頭蓋のなかでも思い出の光景が繰り広げられるからである。ここで詩人の頭蓋は、「アルコーヴ」と等しくなる。しかし、詩人がみずからの頭を恋人の髪のなかに沈めるとき(「髪」第5節)、恋人の髪は詩人を包み込む「暗黒の天幕」となる。ここで「包むもの」と「包まれるもの」の逆転が生じる。恋人の髪が詩人の頭蓋とその頭蓋とアナロジーの関係にある「アルコーヴ」をも呑みこんでしまうのである。ここでは空間が、通常の「包むもの」と「包まれるもの」の関係を保っていない。

時間についても奇妙なねじれが生じている。恋人の髪の薫りから蘇る思い出の世界は、「憔悴したアジア、燃えるアフリカ」*la langoureuse Asie et la brûlante Afrique* (t.I, p.26)である。しかし、「憔悴した」*langoureuse* という形容詞は、地理的な名称に添えられるものというより、人間のさまを描写するのに用いられることが多い。この形容詞とともに、「燃える」*brûlante* という形容詞も、愛の場面を喚起する人間的な形容詞でもある。これらの形容詞は、詩人のかたわらに現前している恋人の存在を強く暗示している。つまり、思

い出の世界の時間(過去)と、詩人が恋人の髪に恍惚としている時間(現在)が、ここで混ざり合っている。しかも、詩人は、思い出と現在が混ざり合った「アルコーヴ」のなかで、未来にむかって行動を起こそうとしている。「僕はあそこへ行こう」*J'irai là-bas*、「僕は沈めよう」*Je plongerai*、「僕の精神は(…)知るだろう」*mon esprit (…)* *Saura*、「僕の手は(…)撒くだろう」*ma main (…)* *Sèmera*。これらの表現に見られるように、詩人はみずからの行為を、単純未来形において語る。このことによって、思い出の世界は、時間の線的な流れを逸脱したところで展開していることが分かる。

「髪」の第5節において、詩人の精神を愛撫する「横揺れ」*roulis* は、思い出の世界で船に乗っている詩人(過去)と、愛のいとなみのなかにある恋人たちの動き(現在)と、過去・現在・未来を自由に行き来する詩人の精神(未来)を、同時にあらかずのものなのであろう。アルゴ船団の船長イアソンとしての詩人ボードレールが求める「金羊毛」とは、このような空間、時間を超越した、無限をめざす理想郷なのである。

6. 「あまりにも陽気な女」 *Celle qui est trop gaie*

だが、ボードレールは、女性の発散物にいつまでも陶然としているわけではない。というのも、女性から発散されるものの感覚があまりに強烈なものとなると、それはボードレールをただ茫然とさせる毒ともなりうるからである。たとえば先に挙げた唾液だが、それはその効果が強すぎるので、詩人の主体性を脅かす「毒」となるのである。

…………お前の唾液の

恐ろしい驚異、それは腐蝕し、

悔いもなく僕の魂を忘却に沈め、

眩暈を押し流しながら、

気絶した僕の魂を死の岸辺へと打ち上げる！

「毒」 *Le Poison*, t.I, p.49

眩暈の効果は、それが軽いものであれば快くもあろうが、あまりに強烈すぎると、それは錯乱を引き起こし、詩人を死の岸辺にまで運ぶものとなる。いまや、ボードレールは、女性からの発散物に、両義的な呼びかけをするようになる。「おお、僕の心の生にして死よ」(*Le Flacon*, t.I, p.48)。「おお、甘美さよ！おお、毒よ！」(*Le Balcon*, t.I, p.37)。

女性から溢れ出る様々な発散物は、ボードレールの内なる暗いシベリアを爆発させる力を有していた。しかしどうしてボードレールみずからの内にそれに匹敵するエネルギー源が見いだせないのか？ おそらく、女性の方にこそ豊饒なる生命力が男性以上にそなわっているからなのかもしれない。そうでなければボードレールは女性の発散物の功德を讃えはしなかったはずである。

たとえば、「あまりに陽気すぎる女に」という詩をとりあげてみよう。ここで詩人の恋人は「美しい風景」と比較されている (t.I, p.156)。彼女の笑いは「爽やかな微風」のようで、その腕や肩からは健康が光のように迸っている (ibid.)。つまり恋人は、豊饒なる自然とパラレルな関係にあるわけである。

ところが詩人自身はどういうポジションにあるのであろうか？ 彼は「無為」を引きずっている (ibid.)。つまり、なものかを豊かに生産するような活力に欠けている。こんな彼にとって、草木の緑や春の勢いは、彼の不毛ぶりを「侮辱」するかのようであり、太陽の輝きは、彼の非生産性を皮肉な笑いでうち見やるようなものにうつる。

そこでボードレールはそれに抗う素振りをみせる。つまり、豊饒なる自然の生産性を「罰する」という行為をするのである。

たまたま、僕が美しい庭園を、
「無為」を引きずって歩いていた時に、
皮肉を絵にかいた太陽の奴が
この胸を引き裂くのを感じたものだ。

それに新しい春、草木の緑も、
僕の心を侮辱したから、
腹いせに花一輪摘み取って
傲慢無礼な自然を罰してやった。

「あまりに陽気な女へ」

A celle qui est trop gaie. t.I, p.157

無為、非生産、不毛をひきずるボードレールにとって、あまりに陽気な女性と自然の豊かな多産性は、皮肉とも傲慢無礼ともとれるのである。彼は、もはや以前のように、瀕死のダヴィデとして、女性からの発散物に恍惚とだけはしていられない。むしろそのような豊饒性や多産性を罰しようとするのである。

7. 「サレド女ハアキタラズ」 Sed non satiata

女性は豊饒なる自然と類縁関係にある。普遍的な生命力から生じる多産性は自然と女性に共通している。しかしボードレールは、この際限のない豊饒さを前に、やがて敗北の声をあげることになるのである。

たとえば、生命力の根源にあるとも言ってよい性的な欲望の力の、女性における際限のなさを前にボードレールは叫ぶ。

おお、憐みのない悪魔！ そんなに炎を注がないでくれ
お前を九回抱こうにも、僕は地獄を九度囲んで流れる
スティックス（三途の川）ではない

「サレド女ハアキタラズ」 Sed non satiata, t.I, p.28

ここには女性の果てしない欲望と、その欲望の奥深さについていけぬ男性ボードレールが描かれている。詩人は性的欲望のおわりのない充足のなかに地獄を見ている。そして付け加える。「お前のベッドという地獄のなかでプロセルピナとなる（…）こともできない」 (ibid.) と。

このプロセルピナというのは、ギリシャ神話に出てくる冥界の「女神」である。プロセルピナがここで召喚されているのは、明らかに女性同士の愛、レズビアンへの愛への暗示がある。女性における欲望の際限のなさは、彼女らをレズビアンの世界へ導くのであろう。女性の欲望についてゆけぬ詩人は、みずからを女性と化してその際限ない欲望のいとなみに加わりようとする。しかし男性である彼にはプロセルピナのような女神になることは不可能である。詩人ボードレールは女性同士の欲望の世界を凝視する。

みずからを鏡に映し、おお実りない快樂よ！

眼窪んだ娘たちは、己が身に恋こがれ、
青春の血のたぎる熟れた果実を愛撫する

「レスボスの女たち」 Lesbos, t.I, p.150

しかし、ボードレールは男性である。女性たちだけの快樂の場には参加できない。彼は、その欲望の果て無き深淵を傍らで見つめているのみである。

8. 自らを知らぬ悪

性的な欲望という「呻く怪物」(Femmes damnées, t.I, p.154) は、「火山のように焼け爛れ、空虚のように深い」 (ibid.)。レズビアンへの愛におもむく女性たちを、ボードレールは「劫罰を受けた女たち」と呼ぶ。「お前たちの罰はお前たちの快樂から生まれるだろう」とも言いながら。

だが、性的な欲望を生きる糧とする娼婦という存在は、ボードレールには、「《死》を笑い、《放蕩》を鼻先であしらう」(Allégorie, t.I, p.116) 者と映ずる。彼女はみずからのうちに息づく欲望の声に恐れも抱かず従っている。彼女は欲望の充足が、果てしない螺旋階段を下降することだとは思わない。たとえ快樂の報いが死であるとしても、「彼女はみどり児のように、憎しみも後悔もなく《死》の顔をながめるだろう」 (ibid.)。人間の内なる自然の、無動機で盲目的、アモラルで際限のない営みになんの自覚もなく従うことは、欲望の深淵の坂を転がり落ちていくことだという意識がボードレールに生まれる。

……………落ちていけ、落ちていけ、嘆かわしい犠牲者たちよ、

永遠なる地獄の道を落ちていけ！

(中略)

そして肉欲の猛り狂う風は、

お前たちの肉体を古ぼけた旗のようにばたばた鳴らす

「劫罰を受けた女たち」 Femmes damnées, t.I, p.155

性的欲望の飽くなき追求は肉体をぼろきれのようにしてしまう。しかし逞しい欲望の貯蔵庫である女性は、そんなことに頓着する素振りさえ見せない。むしろ彼女たちは「あまりに陽気」であり、「みどり児」のように無邪気なのである。

だが、ボードレールは言う、「自らを知る悪は、自らを知らぬ悪よりも醜くなく、より治癒に近い」(Notes sur les Liaisons dangereuses, t.II, p.68) と。われわれはみな、自然な傾向として、際限なき欲望の充足を盲目的に求めるものとしても、すくなくともそのことを知っていれば、治癒の可能性がないわけではない。人間の内なる自然の欲望の存在を直視すること、すなわち、「《悪》のなかに在るという意識」(L'Irrémédiable, t.I, p.80)、これこそが、ボードレールにとって人間の「唯一の慰撫であり栄光」(ibid.) となるのである。そしてこれは、「ダンディ」たるものの倫理でもあった。「彼(ダンディ)は鏡をまえに生き眠らねばならぬ」(Mon cœur mis à nu, t.I, p.678)。

しかし、女性の自然な無邪気さは、内なる自然の欲望に従うのみであり、その欲望の際限のなさを意識しようとしなない。ボードレールによれば、女性や子供に特有の「一途な感情」(Cor. t.II, p.234) は、ひたすら自然な欲望の成就に向けられており、その目的の達成のためにはいかなる犯罪をも辞さない。「このような感情は、女を駆り立てて、宝石を買うかやくざな男を養うために夫を殺させもします」(ibid.) とボードレールは母親宛ての手紙で述べている。「女性はお腹が空くと食べたがる。喉が渇くと飲みたがる。発情するとされたがる。たいしたものだ。女性は《自然》である。すなわち忌まわしい」(Mon cœur mis à nu, t.I, p.677)。ダンディ＝ボードレールは、女性における自然な欲望発露に悪を見だし、「恐怖」の念からあとずさりする。しかし女性の側は無頓着なままである。

お前がその道にたけていると思っっているこの悪の大きさが
かつてお前を恐怖であとずさりさせたことはないのか？

「詩編第 25」 XXV, t.I, p.28

だが、たとえ自らを知らぬ悪であっても、「《悪》から美を抽出すること」(Projet de préfaces, t.I, p.181) をおのれの務めとして引き受けた芸術家ボードレールにとって、女性がやはり不可欠な存在であることには変わりはないのである。

9. 人間の内なる自然

ボードレールは、女性を通して、人間の内なる自然の豊

饒さと逞しさに魅了されると同時に、その際限の無い欲望のありように「恐怖」し悪を見いだすようになった。つまり、自然な欲望のままに生きることは、彼の眼には悪と映じるのである。

ここから、自然のままの人間は元来無垢で罪もないという人間性善説的な議論にたいして、彼は真っ向うから対立することになる。「生まれながらにして善良なる人間とは一体何です？ どこでそんな人にお目にかかりました？ 生来善良な人間とはひとつの怪物でしょう、つまりひとつの神だと私は言いたいのです」(Cor., t.I, p.337) と彼は、A. トゥースネルへの手紙で述べている。ボードレールは、人間が生まれながらに有している自然な状態を、回帰すべき無垢なる楽園とは見做さない。

ボードレールは、人間の内なる初源的な自然状態のなかに、「人間の本源적인な邪悪さ」(Notes nouvelles sur E.Poe, t.II, p.323) と、「生まれながらの意地悪さ」(L'Œuvre et la vie de Delacroix, t.II, p.767) を看取する。そして悪を吹き込むのは、人間の内なる生来的な自然なのである。

自然は何も教えない。あるいはほとんど何も教えない。すなわち自然は人間に、眠ること、飲むこと、食べること、自分の身を守ることを強制するだけだ。(中略)。自分の同類を殺したり、食べてしまったり、監禁したり、拷問にあわせたりするよう人間を仕向けるのもやはりこの自然だ。というのも、われわれが必要な次元から出て、贅沢と快楽の次元に入るや否や、自然は罪悪しか勧めないことをわれわれは見てとるからである。(中略)。貧しく、身体の不自由な両親を養うようわれわれに命ずるのは、哲学であり(…)、宗教である。自然(これはわれわれの欲得心の声以外の何物でもない)は両親を殴り殺すことをわれわれに命ずる。人間という動物がそれにたいする嗜好を母体内で汲んできた罪悪は、本源的に自然である。これに反して、美德は人工的であり、超自然的だ。(中略)。悪は、努力なしに、自然に、宿命的になされる。善はつねにひとつの人為の産物である。

「現代生活の画家」

Le Peintre de la vie moderne, t.II, p.715

女性の自然な無邪気さは、人為的で超自然的な努力で内なる自然の欲望を抑制することを知らないでいる。ダンディは、悪のなかにあるという意識だけはもっている。したがって「女性はダンディの逆である」(Mon cœur mis à nu, t.I, p.677) ということになる。

10. 破壊への嗜好

さらにボードレールにおいては、人間の内なる自然は、破壊の衝動とも結びついている。「破壊にたいする自然な喜

び」(Mon cœur mis à nu, t.I, p.679) と、彼は、1848年の2月革命の動乱を思い出しながら日記に書いている。そして人間の自然状態における善性を信じて疑わない自然派を揶揄するかのよう、次のように続けている。「もし自然なものすべてが正当であるなら、破壊への嗜好は正当な嗜好である」(ibid.)。だが、先にも論じたように、ボードレールは人間の内なる自然の欲望のなかに悪の温床をみていたので、次のように書き加えてもいる。「犯罪にたいする自然な愛」(ibid.) と。

なおさらに、ボードレールにあつては、この内なる自然に由来する破壊への嗜好は、官能的な欲望、性的な衝動とも関連づけられている。『悪の華』初版(1857年)で「破壊」と題された詩は、初出時(1855年)には「官能」と題されていた。この詩において、官能は、「女性のなかでも最も魅惑的な女性のすがた」(La Destruction, t.I, p.111)をとって詩人の前にあらわれるのであるが、詩人の混乱した眼のなかに彼女が投げ込むのは、「汚れた衣服、開いた傷口、／そして、血まみれの《破壊》の道具」(ibid.)なのである。ここには明らかに、性行為、男性器、女性器への暗示が認められる。

ボードレールが性行為に与える性格には、多分にサド侯爵を思わせるものがある。実際ボードレールは性行為のうち、破壊的な作用、解体行為的なものを見いだしている。その日記のなかで、性行為に言及しながら、性的な恍惚のことを解体という語で置き換えようとしている。「私は、この種の解体に恍惚という語を用いるのは、冒瀆をなすことだと思う」(Fusées, t.I, p.651)。つまり彼は、人間の内なる自然に由来する性的な欲望を、破壊への自然な愛、あるいは犯罪への自然な嗜好と結び合わせて考えている。

エロスとタナトス。破壊、解体としての性行為が、極限まで押しすすめられた陰惨な姿が、「腐肉」という詩である。蠅や蛆が喰りをたてて波のように上下する腐乱した死体、骸骨が壮麗な花のように咲き誇り、悪臭と毒の汗を発散するこの屍は、「多淫な女のように、両足を宙に開いて」(Une Charogne, t.I, p.31) いる。性行為を暗示する姿勢である。疑いもなくボードレールは、ここでの腐肉の状態を、性行為という解体作業が人体におよぼす最終的な段階として思い描いている。

しかしこの詩の最後でボードレールは、性行為による極限的な物質の解体に対して、「解体した僕の恋愛の、形と神聖な本質を僕は保った」(ibid.) と言う。おそらくここでボードレールは、詩という芸術による、不蝕性、精神性を対置することによって、みずからの生存の危機を救い出しているのであろう。

11. ボードレールにおける恋愛

それにしても、ボードレールにとって恋愛とはいかなるものであろう。「恋愛とは何か? 自己の外に出ようとする

欲求だ。人間は崇拜する動物だ。崇拜する、それは自己を供犠に付し、自己を売春に付すことだ。ゆえにすべての恋愛は売春である」(Mon cœur mis à nu, t.I, p.692) と彼は言う。自己を供犠に付し、売春に付す、とはどういうことか? おそらく、おのれの最も内密な、秘められた大切な部分を、他者のために犠牲にするという意味であろう。また自己の外に出ようとする欲求は、逆に言えば他者と出会いたい、他者と合一したいという欲求であろう。

だが恋愛において、自己を犠牲にしてまでみずからを売春にゆだねようとする情熱は、持続し得るものなのであろうか? 否、とボードレールは答える。「恋愛は高邁な感情、すなわち売春の嗜好から生まれることがある。しかしやがてそれは所有の趣味によって腐敗させられる」(Fusées, t.I, p.649)。他者のためにおのれを犠牲にしようとする情熱は、他者を所有しようとする情熱によって墮落する。つまり他者と合一したいという欲求は、他者を従属させたいという欲求に取って代わられるのである。ペシミストで冷笑家のボードレールは、売春としての恋愛の高邁な情熱の現実性をほとんど否定する。「恋愛においては、心からの相互理解は誤解の結果である。この誤解、これこそが喜びなのだ」(Mon cœur mis à nu, t.I, p.695-696)。恋人同士が、相手のために自分を犠牲にし相手と合一しようとしても、一方では服従させようとする意志が双方でぶつかりあっているのである。

また、恋人同士のあいだには、「乗り越えがたい深淵、疎通を阻む深淵が、依然として越えられないまま残っている」(ibid.)。

したがって、恋人同士の完全な和合は、ボードレールによると、ほんの一瞬のあいだ、閃光のようにきらめくだけのものなのである。

僕たちはただひとつの閃光を交わすだろう

別れの思いの強く籠められた、長い嗚咽のように

「恋人たちの死」 La Mort des amants, t.I, p.126

売春の趣味、自己の外に出ようとする欲求、おのれを他者のために犠牲にしようとする情熱は、所有の趣味によって墮落し、相互理解は錯覚にすぎず、恋人同士のあいだには乗り越えがたい深淵が口を開けているとしたら、恋愛に安らぎや休息、平和を見いだそうとしてもそれは空しいこととなるだろう。

12. 外科手術としての恋愛

ボードレールにおいては、人間の内なる自然な欲望に無自覚にしたがうことは悪をなすことであった。そして性行為は破壊する行為、解体する行為とシノニムであった。恋愛における売春の高邁さは、所有の趣味によって墮落している。しかも恋人同士のあいだには深淵が横たわっている。

さらにふたりのあいだには同等の立場を保障するものはない。むしろつねに力の不均衡が存在している。

恋愛は拷問または外科手術にとっても似ているということを私の覚書のなかに既に私は書いたと思う。(中略)たとえ恋人ふたり同士が非常に夢中になって、相互に求め合う気持ちで一杯だとしても、ふたりのうちの一方が、いつも他方より冷静で夢中になり方が少ないであろう。この比較的醒めている男ないし女が、執刀医あるいは体刑執行人である。もう一方の相手が患者あるいは犠牲者である。

「火箭」Fusées, t.I, p.651

こういうわけで、恋愛がボードレールに引き起こす苦痛は、たとえ心理的なものであろうと、ほとんど肉体的な苦痛を伴うものとなる。「短刀の一撃のように、うめき声をあげている僕の心臓に、突き刺さったお前」(Le Vampire, t.I, p.33)と、詩人は恋人に呼びかける。ここで腑分けされる患者の立場にあるのは詩人の方だ。恋人である女性は、執刀医か、体刑執行人となる。「祝福」という詩に登場する詩人の恋人は、つぎのように描かれている。

そして私の爪は、^{ハルピュイ}驚女神の爪のように、
彼の心臓にまで届く道を切り開くことができるでしょう。

ぶるぶる震えびくびく動く、ほんの幼い小鳥のような、
あの真っ赤な心臓を、彼の胸から抉り出しましょう
……

「祝福」Bénédictions, t.I, p.8

恋人の爪は、まるで執刀医のメスのように、詩人の胸を切り開いて心臓を摘出する。さらに、恋人の内に宿る自然で逞しい生命力は、抜き取った詩人の心臓を咀嚼して、おのれの滋養となすにいたる。「お前の歯並みには毎日一個の心臓が必要だ」(XXV, t.I, p.27)。執刀医、体刑執行人の位置にある恋人は、肉食獣の相貌をも帯びるようになる。詩人の胸は、「女性の爪と獐猛な歯で荒らされた場」(Causerie, t.I, p.56)となってしまう。

しかしながら、詩人がつねに、患者や犠牲者の立場にとどまっていたわけではない。ボードレール自身、上に述べていたように、恋人ふたりのいずれかが、かわるがわる立場を交代するのである。

13. ボードレールのサディズム

ここにサディスト・ボードレールが姿をあらわす。「僕はお前をぶってやろう、怒りもなく、／憎しみもなく、屠殺人のように」(L'Héautontimorouménos, t.I, p.78)。詩人は怒り

も憎しみもなく恋人を殴ろうとしている。だがこのサディズムには目的がある。「お前の臉から、／僕のサハラを潤すために、／苦痛の水を逆らせよう」(ibid.)と詩人は続けている。

ここで、女性を供犠に付そうとする欲望がボードレールのうちに生まれる。宗教的な意味における「功德」の概念、すなわち、先に触れたパウロが手紙で述べている宗教的な功德の概念が再び呼び戻されるのである。ジョゼフ・ド・メーストルの神学的な思索においては、犠牲となる者が清らかで無実であればあるほど、その苦しみが他の罪びとらの贖いとなると信じられていた。それと同じように、あまりにも豊饒で多産で自然な女性を供犠に付せば、詩人の不毛さの贖いとなるという発想が出てくるのである。

悦ばしげなお前の肉を罰するため、
人に許したお前の胸を痛めつけるため、
驚きあわてたお前の脇腹深く、
大きく開いた傷口をお見舞いしよう。

「あまりにも陽気な女に」

A celle qui est trop gaie, t.I, p.157

女性からの発散物の「功德」によって生気を取り戻した詩人ではあったが、ここにおいては逆に、女性の豊かな自然性を供犠に付すことが、詩人の内的早魘を潤す「功德」となるのである。『旧約聖書』に記述されていた処女の「功德」から、『新約聖書』における聖人の供犠の「功德」へ発想が転換するのである。

しかしながら、女性の瞳から迸る苦痛の涙がどうしてボードレールにとって内的活性化の「功德」を持つのか？

疑いもなく女性の苦しむさまに陶醉を見いだしているからである。詩人のサディズムには性的な快感がともなっている。だがL. ベルサーニによると、性的快感をとまなうサディズムには、その下地に性的快感をとまなうマゾヒズムがあるのである。というのも、苦しんでいる相手のマゾヒスティックな快感に心理的に同化できなければ、またそのマゾヒスティックな快感をあらかじめ知っているのなければ、サディズムが性的快感をとまなうものとして経験されることはないはずだからである¹¹⁾。

G. ブランは述べている。「ボードレールのサディズムはたいていの場合極端なマゾヒズムの報復としてあらわれる¹²⁾」。このことを最もよく例証しているのが「あるマドンナに」という詩である。この詩において、詩人はまず、みずからの内面の奥底に祭壇を設け、恋人をマドンナ像としてそこに奉納しようとする。うやうやしくもおのれを卑下した調子で、詩人はマドンナ像を飾り付ける。マドンナ像の外套の縁は詩人の「涙」で縁取られ、その靴は詩人の「尊敬」でできている。詩人の愛の憎しみはマドンナ像の台座となってマドンナに踏みつけられている。ここで詩人は、J. プレヴォが述べるように、「それに対する想像上の復讐を引

き出す前に、みずからの敗北を完璧なものし、完全に味わいつくさねばならない¹³⁾。つまりこの詩の最初の詩人の卑下の調子は、最後にいたって残虐なサディズムに効果的に転換できるよう、徹底的に卑屈であろうとするのだ。そして言うまでもないがこのような徹底したマゾヒズムは詩人にとっては快感なのである。このマゾヒスティックな快感が、最後にサディズムの快感として爆発する。

黒い快感だ！ 七つの「大罪」でもって
悔いに胸ふたぐ体刑執行人のこの僕は、七つの「ナイフ」をつくろう
(中略)
僕はこのナイフ全部を突き刺してやろう、お前のびくびく動く「心臓」に、
お前のすすり泣く「心臓」に、お前の血したたる「心臓」に！

「あるマドンナに」 A une Madone, t.I, p.59

しかしながら、J.-D. ヒューバートも指摘しているように、詩人は恋人の心臓にナイフを突き刺すことで、結局は自分自身の心臓にナイフを刺していることになる。何故ならマドンナ像は詩人の内面の祭壇に納められていたからである。従ってこのサディズムには自虐的なマゾヒズムが混じり合っていることが分かる。サディスト・ボードレールは「自ラヲ罰スルヒト」でもあるのだ。「僕は自分の心臓の吸血鬼だ」(L'Héautontimorouménos, t.I, p.79) と詩人みずから告白している。

14. 決闘としての恋愛

いずれにせよ、双方のうちどちらかが執刀医、体刑執行人であり、他方が患者、犠牲者となる場合もあれば、その逆の関係もあるといった恋愛関係は、まさしく「決闘」(Duellum, t.I, p.36) と呼ぶにふさわしい。ボードレールにおいては、性行為は破壊への自然な嗜好に結びついた一種の解体作業であった。自己を犠牲にしてまでみずからを売春に付すという高邁な情熱は、所有への意志によって墮落してしまう。なおかつ乗り越えがたい深淵が恋人同士のあいだに存在する。恋人たちは、破壊への自然な嗜好と所有への意志につき動かされ、深淵の上で、かわるがわるに、執刀医—患者、体刑執行人—犠牲者の役回りを演じながら、恋愛という決闘を繰り広げるのである。

この勝負、この鋼のカチカチ触れる音は、泣きわめく
恋愛の
虜となった青春の喧騒だ。

剣は折れた！ 僕等の青春のように、
愛しいひとよ！ だが歯や研ぎ澄ました爪が

剣と当てにならぬ短剣の復讐をすぐさまする。

おお、恋愛によって潰瘍となった熟した心臓の激怒！

「決闘」 Duellum, t.I, p.36

まさにこうなると、「快樂のときでさえ、愛するものを抱きしめたいのか殺したいのか分からなくなってしまう」(Idéolus, t.I, p.624) であろう。ボードレールにおいて、恋愛は快樂と苦痛のないまぜになった倒錯的なものとなる¹⁴⁾。

15. 「殉教の女」 Une Martyre

では、恋愛において、破壊への自然な嗜好と所有への意志を同時に満たすことは、どのようなかたちであれば可能なのか？ それは、最も罪深く、最も悪しきかたちではあるが、おそらく殺人と屍姦のうちに見出されるであろう。ボードレールは、性行為の外科手術のような破壊的性格にすでに気が付いていたが、恋愛の相手を完璧に所有するには、殺人と性行為を同時に行うことで可能になると極限まで妄想するようになる。そのような殺人と屍姦の陰惨なタブローが、「殉教の女」という詩である。G. ブランが、「不快さの限度を超えたこの詩が、1857年に有罪とされなかったのだから、あいた口がふさがらない¹⁵⁾」と評したほど、この詩は『悪の華』のなかでとりわけ衝撃的である。

詩人はまず、殺人が行われた密室のあり様をゆっくりと描写する。部屋の中は温室のように生暖かく、危険で不吉な空気が澱んでいる。頭の無い死体がベッドの上に横たわり、シーツは死体から流れる鮮血を牧場のような食欲さで吸い込んでいる。犠牲となった女性の頭はナイトテーブルの上に宝石類と混じって置かれており、その眼からは漠とした白いまなざしが洩れている。一糸まとわぬ身体は、自然が彼女に与えた秘密の華やかさと致命的となった美を、だれ憚ることなく曝している。この死体の脚にはまだピンクの長靴下や金糸の縁飾り、靴下止めなどが思い出のように残っている。詩人は、この死体の優美な肩と、やや尖った腰にわれわれの注意を向けることによって、この死体の若さを強調する。そして詩人はこのおぞましい死体に向かってこうたずねるのである。

お前が、生きていたとき、あれほどの愛をもってしても、

堪能させることができなかった、復讐心の強い男は、

お前の、動かない、意のままの肉体の上で
測り知れないその欲望を満たしたのか？

「殉教の女」 Une Martyre, t.I, p.113

恋愛という決闘においては、男性の所有への欲望は、相手が生きていかに満たされるわけにはいかない。G. ブランも言う、「ひとは、対象のすべてを破壊するとき以外、

それをおのれの所有となすことはほとんどできない¹⁶⁾と。そこで男性は屍姦のうちに充足の唯一の形態を見いだす。女性は男性の欲望の犠牲となる。恋愛という疑似宗教の殉教者となる。

だが、たんに男性がこの供犠によって相手を完全に所有するだけではない。男性の側も永遠に供犠の女性に忠実でありつづけるであろう。

お前の夫は世界を駆け巡る、そしてお前の不滅の形は
夫が眠るときもその傍らで見守る。

疑いもなくお前と同じように、彼はお前に忠実であらう

そして死まで心変わりもすまい

同上 *ibid.*

しかし、恋愛における完全なる所有という不可能な夢は、むしろ詩人の想像力の中でのみ可能なものでしかないはずだ。現実には、恋愛はボードレールにとって外科手術であり、拷問であり、決闘なのである。

16. おのれの実質を失う「恐怖」

もし恋愛が、外科手術や拷問であるとしたら、恋する者の身に何が起こるだろう？ 絶えざる流血、絶えざる消尽ではないか？

ここで、恋愛においておのれの実質が喪失することにたいする「恐怖」が、詩人のなかで覚醒する。ボードレールにとって、愛の神キューピットが戯れにシャボン玉にして風のまにまに吹き散らしているもの、「それは僕の脳みそ、／僕の血、僕の肉体」(*L'Amour et le Crâne*, t.I, p.120)なのである。女性の内にやどる旺盛で自然な生命力は、詩人の実質を徐々に吸い取っていく。「この世の血を飲んでしまう者」(XXV, t.I, p.28)と形容される女性の、「腹の上では《殺人》が愛らしく踊っている」(*Hymne à la beauté*, t.I, p.25)。愛くるしいバンパイアである女性、「彼女は僕の骨のすべての髄を吸ってしまった」(*Les Métamorphoses du Vampire*, t.I, p.159)と、詩人は嘆く。

おのれの実質を失うことにたいする詩人の恐怖は、傷口もなく血が流れ出すという、血友病の悪夢にまでひろがる。

時折僕は自分の血が波打って流れているように思うことがある

(中略)

だが傷口を捜そうとわが身をまさぐっても無駄だ。

(中略)

僕は恋愛に忘却の眠りを求めた。

だが恋愛は僕にとって針のむしろにすぎず、

あの残酷な娘たちに飲みものを与えるようにできている！

「血の泉」*La Fontaine de sang*, t.I, p.115

外科手術、決闘である恋愛において、みずからの実質を喪失しつづけた詩人の哀れな成れの果てが描かれているのが「シテール島への旅」という詩である。ヴァットーの絵で有名なシテール島は、ヴィーナスの島であり、恋愛の祖国を寓意する地であり、通常は雅びで、喜ばしげで、ギャラントなものとして描かれる。ボードレールは、しかし、この島の趣向を陰惨なものにする。シテール島で詩人は絞首台にぶらさがる罪びとを見いだす。恋愛に樂園を見いだそうとした罪で罰せられているのである。そしてほかならぬこの絞首刑の罪びとこそ、詩人自身なのである。

おお、ヴィーナス、お前の島で僕が見出した、立ったもの、

それは僕のイメージがぶらさがっている、象徴的な絞首台ばかり

「シテール島への旅」*Un Voyage à Cythère*, t.I, p.119

ぶらさがる自分のイメージを、嫌悪なく見つめる勇氣は詩人にはない。だが、これこそが「オンナノセカイ」に恍惚として湯浴みしていたものの末路なのである。女性の溢れんばかりの自然な発散物に、みずからの不毛を癒す刺激を求めたボードレールではあったが、やがて恋人との恋愛は、外科手術とも決闘ともなり、みずからの実質を失うものであることが判明した。

だが、ボードレールは美に奉仕することを誓った芸術家、詩人のはずである。彼は美に抗うことはできない。「天国から来ようと地獄から来ようと、それがなんだ、／おお《美》よ」(*Hymne à la beauté*, t.I, p.25)。女性の美は詩人の美への愛を刺激してやまない。内なる自然の逞しさを無邪気にさらけ出す女性に悪を見いだしつつも、彼はその悪から美を抽出することをみずからの使命としている。美は、「魂の苛酷な災い」(*Causerie*, t.I, p.56)である。「災い」と訳したフランス語の *fléau* にはさまざまな意味がある。まずそれは、柄の先に鎖があり、その鎖の端にとげのある鉛玉をつけた、中世の武器である。この意味における *fléau* は決闘のための道具のシンボルとなり得る。また *fléau* は、ペストや天災といった、宿命的な災禍という意味もある。これは詩人と女性との宿命的な関係をあらわすメタファーとなり得るだろう。いずれにしても、*fléau* としての女性は、詩人には避けがたい宿命の存在なのである。

17. 美術品としての女性

女性の内に息づく逞しくも執拗な生命力や自然な欲望の発露に、ボードレールは悪の存在を認め恐怖におののいて後ずさりした。恋愛という決闘では彼の実質が消尽するばかりであった。だが、ボードレールは、敗北の立場にいつ

までも甘んじているわけではない。自我の拡散によって散逸してしまったみずからの実質を、自我の集中によって再び蓄積しようとする。「自我の拡散と自我の集中について。すべてはここにある」(Mon cœur mis à nu, t.I, p.676)。しかし、今回は、サディズムに訴えることによって自我を集中させようとするのではない。自我の集中あるいは主体性の回復は、ダンディズムの形のもとになされるのである。

ダンディとは自己を見張る意識であると同時に、自己を抑制する者である。彼はみずからを売春には付さない。おのれの実質が消尽することを最も恐れる者である。ダンディ=ボードレールが女性を見る視線は、もうひとりのダンディ、ドラクロワの視線と重なるであろう。「彼(ドラクロワ)は女性を一個の美術品として、それも大変美しく、心を高揚させてくれるものではあるが、しかしひとたび心の垣根を許すと、反抗的で迷惑ばかりかけ、時間も精力も食欲にむさぼる美術品として考えていた」(L'Œuvre et la vie de Delacroix, t.II, p.766)。おなじダンディとしてボードレール自身、ドラクロワの見方を共有していたのではないか？

ボードレールは、自然にたいしてもそうしたように¹⁷⁾、女性を「枠組み」cadreの中に閉じ込めようとする。枠組みによって縁どられることで、女性の内なる豊饒で過剰な自然が、詩人に嫌悪を起させない程度にまで抑制される。また枠組みの中に据えておけば、女性が決闘を挑んでくることもない。詩人の実質が吸い取られることもない。女性は枠組みに縁どられることで、ドラクロワの場合と同じように、美術品に近づくのである。

ここで枠組みとして相応しいのは、金属や鉱物の硬さ、冷たさである。この硬さと冷たさが、女性の内なる自然の欲望の過剰と熱を緩和し取り押さえるのである。と同時に、金属や鉱物の内部にも熱が伝わり、それらが生気を帯びた様相を取りもする。そのことを例証しているのが「装身具」という詩である。

この詩において、恋人は裸であるが、詩人の心を察して、音のよく鳴り響く装身具を身につけている。この装身具が彼女にムーア人のような様相を与えている。J. プレヴォは、この詩のイメージはドラクロワの『アルジェの女たち』から想を得たに違いない、と述べている¹⁸⁾。たしかにこの詩の中の装身具が、イメージを絵画的にし、オリエンタル趣味を醸し出している。しかしそれらの装身具類はまた、裸の恋人の枠組みとして、彼女の過剰な欲望と熱を抑制するものとして役立っている。一方、「金属と石の光輝く世界」(Les Bijoux, t.I, p.158)は、「生き生きとして嘲弄的な音」を立てている。「生き生きとして嘲弄的な」という属詞は、本来「勝ち誇った様子」をみせている恋人に帰すべきものだろう。しかし装身具はここでは換喩的に女性の一部となっている。「女性を飾るものすべて、その美を輝かせるのに役立つものすべては、女性そのものの一部である」(Le Peintre de la vie moderne, t.II, p.714)とボードレール自身述べている。枠組みである装身具は、恋人からの熱で生気を与えられ、恋

人自身の属性を帯びるようになる。しかも詩人はこの装身具の世界に恍惚と陶酔する。それは裸の恋人に陶酔する以上であるかにさえ見える。「何と僕は狂ったように、響きと光とを縋いまぜた物たちを愛することか」(Les Bijoux, t.I, p.158)。

枠組みとして役立つのは、装身具ばかりではない。「家具、金属製のもの、金びかの飾り」(Le Cadre, t.I, p.39)も、女性の縁飾りの役割をはたす。女性を縁どるこれらのものは、彼女のすがたを一枚の「肖像画」(Le Portrait, t.I, p.40)へ変貌させるのである。

また、ボードレールが化粧を礼賛するのも、化粧のもつ人工的な効果が、女性の内なる自然を抑制し、彼女を彫像的な美術品に近づけるからに他ならない。白粉や肉襦袢は、自然な皮膚の肌理と色に「抽象的な統一」(Le Peintre de la vie moderne, t.II, p.717)をつくりだす。この統一こそが「人間存在をたちまち彫像に近づける」(ibid.)とボードレールは言う。化粧によって女性は人工の度合いが高まり、化粧のもつ抽象化作用によって彫像に昇華されるのである。

枠組みとして役立つものは、装身具や家具や化粧などといった、人工的なものだけではない。女性を取り囲む自然の風景そのものが枠組みとなって、彼女自身を一幅の風景画に仕立て上げることもある。

あなたは美しい秋の空です、澄んで薔薇色の！
だが悲しみが僕の中で海のようにのぼってくる

「語らい」Causerie, t.I, p.56

恋人はその周囲の空とコレスポンダンスしている。阿部良雄も言うように、ここには「一枚のパステル画」¹⁹⁾のような趣向が認められる。詩人は恋人を下から見上げている。というのも彼は自分の心象を海と同じ位置においているからである。海の中に悲しみがこみあげてきても、恋人は美しい秋の空と同化している。女性と隣接関係にある空が、隠喩として女性と等しい項に置かれているのは、G. ジュネットに倣って言えば、「隣接性が類似を命じ保証する」からか、あるいは、「隠喩は換喩の中にその支えと動機づけを見いだす」²⁰⁾からであろうか。いずれにしても、内なる自然の過剰な欲望を抱えた、詩人の実質を吸い取ってしまう逞しい生命力は、いまや遠い秋の空と同化している。一枚のパステル画となった女性を、詩人は、下から、まるで美術品か偶像を仰ぎ見るからのように、眺めているだけである。このとき女性は詩人を脅かすことはない。

18. 昇華された女性

女性の肉体の圧倒的な現前をやわらげ、詩人との調和にみちた和解の世界を出現させるのが「思い出」souvenirである。思い出という記憶の濾過装置を通ることによって、女性の過剰な欲望や決闘の生々しさは度合いを減じ、現世な

らぬ世界を垣間みさせもするのである。思い出の世界は彼岸と此岸のあいだにあって女性の肉体の記憶を昇華する。

思い出の母よ、恋人のなかの恋人
(中略)

心地よかったお前の乳房！ 善良だったお前の心！
僕等はしばしば不滅のことどもを語り合った。

「バルコニー」 Le Balcon, t.I, p.36-37

僕の中でお前の思い出は聖体顕示台のように輝いている！

「夕べの諧調」 Harmonie du soir, t.I, p.47

思い出のなかの女性は不滅性を喚起し、まるで霊的な光を発しているかにみえる。しかしボードレールにおいては、思い出のみが女性を昇華するのではない。女性の肉体の現前そのものが霊的な存在に変わる場合もあるのである。このとき女性は詩人を導く守護天使となる。

…………お前の幻は

光輝く魂よ、不滅の太陽にも等しい！

「霊的な夜明け」 l'Aube spirituelle, t.I, p.46

以後、霊的な存在となった女性のふたつの眼は「生きた松明」(Le Flambeau vivant, t.I, p.43) となって苦悩する詩人を導く光となるだろう。

だがここには女性との交流が欠如している。この段階における女性はボードレールの内にとどまるだけであり、ボードレール自身も孤立している。やがてこの孤立は彼の精神の潤いを枯渇させることになるはずである。

結論

アンドロギノスを芸術家の理想として掲げたボードレールにとって、「オンナノセカイ」と「女性からの発散物」は、彼の内的枯渇を潤し様々な感性を目覚めさせるには必要不可欠なものであった。女性から発散される光、色彩、響き、熱、匂い、運動、味わいは、彼の感覚を熱狂させ、彼の自我はそれらの刺激に応じて拡散していった。女性からの発散物のなかでも特に女性の「薫り」はボードレールにおいて特権的な地位を占めており、それは彼において思い出と結び付き、時空を超えた別乾坤を出現させるものであった。

しかし女性のなかに息づく逞しくも豊饒な生命力を、やがてボードレールは、無為と不毛を引きずる自分にたいする皮肉あるいは嘲弄と受け取るようになる。あるいは女性における際限のない欲望を前にしてボードレールは恐怖で後ずさりする。死をも頓着せぬ無邪気な自然が女性の中に宿っており、女性は女性同士で欲望を充足するにいたる。ボードレールは、人間の内なる自覚のない自然の欲望の奔

流を悪と名付けることで、レスボスの愛から一歩ひきさがらる。

ボードレールにおいて内なる自然は悪を教唆するものである。そして性的な欲望は破壊の欲望とむすびついている。恋愛という高邁な情熱は所有の欲望によって墮落し、破壊の欲望と合体することで、それは外科手術、決闘といった様相を帯びるようになる。サディスト・ボードレールはつねに敗北者の立場にいるわけではない。恋愛においては当事者たちがかかわるがわる執刀医－患者、体刑執行人－犠牲者を演じるとボードレールは言う。だがこのような外科手術とも決闘ともつかぬ争いのなかでボードレールはおのれの実質が消尽していく恐怖を感じる。

ダンディとしてボードレールは自我の集中をはかる。ダンディは圧倒的な女性の肉体の現前を緩和しようとする。たとえば装身具や宝石、家具調度、あるいは自然の風景などが女性を縁どるとき、それらは女性の豊饒な生命力の発露を制限し、彼女を一幅の肖像画へと閉じ込める。また化粧のもたらす抽象的な効果は女性を彫像へ近づける。あるいは思い出を通して想起されるとき女性は不滅の相を帯びてボードレールのなかで輝く。霊的に精神化された女性はまるで守護天使のように詩人を見守る。だがここには女性との積極的な交流がなくなってしまふ。

以上が本稿で論述したことである。序においても述べたことだが、筆者はボードレールみずからが言う自我の「拡散」と「集中」、あるいは生の「恐怖」と「恍惚」といった二元性を見取り図の上に立って、ボードレールにおける女性性を跡付けてみたわけであるが、このように跡付けてみると、ボードレールをたんに「女嫌い」 mysogyne のダンディであるとか、退廃的な享楽主義者であると簡単に片づけるわけにはいかないことが分かるはずである。その精神の軌跡は屈折しており複雑である。

従来からボードレールにおけるサディズムや分裂した自我などは、G. ブラン、L. ベルサーニなどの研究によって指摘されてきたことである。だがそれは部分的な記述であり、そのことをボードレールの全体的なパースペクティブのなかで位置づけて考察するものはいままでにあまりなかったのではないかと筆者には思われた。本稿は無謀にもまた拙くもそのような位置づけを試みようとしたものである。

18世紀の啓蒙主義が措定する合理的な主体から、ロマン主義は情熱的でなおかつ抒情的な主体とも言うべきものを措定した。ところが20世紀初頭のフロイトにいたると、18、19世紀が思い描いていた主体の内部には多くの亀裂が走り、その核心部には深淵がうがたれていることが判明したわけである。ところでボードレールというロマン主義の遅れた後継者のなかに既に、後にフロイトの発見によって明るみに出されるような、サド・マゾ的な欲望や、拡散する自我にたいする恐怖がみられた訳である。ボードレールのな主体は、ヨーロッパ近代の主体像を揺るがす衝撃力を持っていた。それゆえにこそ彼の詩編のいくつかは断罪さ

れて発禁処分を受けたのだとも言えるであろう。

ボードレールにおける女性性を分析することでその衝撃力の一端が窺えれば本稿の目論見はある程度達成されたことになる。しかし最終的に「オンナノセカイ」を「恍惚」と「恐怖」をもって揺れ動くボードレールの主体というものをどう総括すべきなのか、あるいは総括すべきではないのか、という点が残るであろう。確かにボードレールにおける二元性、二元論は阿部良雄も指摘しているように「不充足」というか、未解決である。筆者は宗教的なヴィジョンによるボードレールの解釈には与しなかったことはあらかじめ述べておいたが、同様に、審美的なヴィジョンあるいは存在論的なヴィジョンによる解釈にも与しなかった。従来幾多もの語りがボードレールをそれなりのやり方で救い出してきたことは事実であるし、そのなかには感動的でさえあるもの（たとえばイヴ・ボヌフォワのそれ）も確かにあった。だが筆者は彼の二元論を未解決のままに開いておきたいと思う。というのもこの未解決さこそがボードレールのポエジを現代においてもアクチュアルなものたらしめていると考えるからである。

ここでD. ランセの言葉を引いて終りとしておきたい。

『悪の華』を弁証法的に読もうとする誘惑が起こってくるだろう。だが、長い試練を縁取る「始まり」と「終わり」が存在するにもかかわらず、この作品ほど弁証法的でないものはない。宿命的な二元性はボードレールのドラマ全体を成しており、かれはこの二元性をワーグナーの『タンホイザー』における「人間の心を主戦場に選んだふたつの原理、すなわち肉体と精神、地獄と天国、サタンと神」と同一視していたが、しかしこの二元性はこの世の術策によって解消されはしないし、墓の彼方の神秘学によっても乗り越えられてはいない。『悪の華』の最初の部分は二元論的に体系づけられているが、次に続く二つの部分は決定的な侵犯も解決も齎しはしない。フーゴ・フリードリッヒはその評論『現代詩の構造』のなかで、いみじくもボードレールの詩のこの本質的な側面を強調している。かれの言うには、その詩は「サタンの悪と、空虚な理想性のあいだでの、解決のつかない緊張の力学」を抛り所にしているのである。さらに次のことを付け加えよう。この詩はこの緊張と「未解決」から糧を得てさえているのだ。

D. ランセ『ボードレールと詩の現代性』²¹⁾

註

1. ジャン・カスー、『1848年』、野沢協監訳、法政大学出版局、p.39, p.239-240を参照。
2. Georges Blin, *Le sadisme de Baudelaire*, José Corti, 1948, p.78.
3. この概念をみずから神学体系に応用したのが、ボードレールの愛読した神学者ジョゼフ・ド・メーストルである。メーストルは「可逆的な功德」という概念を基に、「血による贖いの力」という理論を打ち立てる。「義人は、自ら欲して苦悩を受け入れることによって、可逆的な功德の道を通じて、自分自身のためだけでなく、罪人たちのためにも償いをおこなう」(Joseph de Maistre, *Soirées de Saint-Petersbourg*, cité dans t.I, p.915)。ボードレールはおそらくメーストルから「可逆的な功德」という語と概念を汲んだと思われる。
4. Jean-Pierre Richard, *Poésie et profondeur*, Seuil, 1955, p.120.
5. Robert-Benoît Chérix, *Commentaire des "Fleurs du Mal"*, Droz, 1962, p.93.
6. Leo Bersani, *Baudelaire et Freud*, Seuil, 1977, p.45.
7. J.-D. Hubert, *L'Esthétique des Fleurs du Mal*, Pierre Cailler, 1953, p.173.
8. Jean Prévost, *Baudelaire*, Mercure de France, 1953, p.217-218.
9. Lloyd James Austin, *L'Univers poétique de Baudelaire*, Mercure de France, 1954, p.222.
10. Dictionnaire des Symboles, Robert Laffont, 1982, p.952.
11. L. Bersani, op.cit., p.105-110.
12. G. Blin, op.cit., p.38.
13. J. Prévost, op.cit., p.269.
14. 決闘としての恋愛というイメージは、1842年以降の、実生活のレベルでのボードレールと恋人ジャンヌ・デュヴァルとの関係を矢張りわれわれに思い出させる。1852年3月23日付の母親宛ての手紙で、ボードレールは、ジャンヌが彼の幸福だけでなく精神の完成にとっても障害となったことを訴えながら、次のように続けている。「僕が考えているのは、僕にとって理性に従うことが不可能になる場合のことであり、僕が小卓でもってあいつの頭を割ってしまった恐ろしい夜のことです」(Cor. t.I, p.193)。しかしながら、ボードレールは生涯ジャンヌとは切れなかった。ボードレールの晩年、ジャンヌが病で半身不随となったとき、彼は彼女を病院に入れてやり、仕送りなどもしている。殺意を持つほど憎んだジャンヌを、結局彼は愛しつづけていたのである。
15. G. Blin, op.cit., p.31.
16. G. Blin, op.cit., p.27.
17. 拙論「ボードレールと自然」人文学報、No.197、東京都立大学人文学部、1988年2月 p.39-71を参照されたい。
18. J. Prévost, op.cit., p.140.
19. 阿部良雄、『悪魔と反復』、p.18、牧神社、1975年。
20. Gérard Genette, *Figures III*, Seuil, 1972, p.45.
21. Dominique Rincé, *Baudelaire et la modernité poétique*, P. U. F, 1984, p. 33.

ボードレールと「オンナノセカイ」

小山 尚之

(東京海洋大学海洋科学部海洋政策文化学科)

要旨： 本稿は「オンナノセカイ」におけるボードレールの自我の恍惚と恐怖の間を揺れ動く様態を跡付け分析することを目的としている。男女両性具有という形態に芸術家の理想的なモデルを見出すボードレールにとって、女性からの発散物は彼の内的健康を回復させるという功德を持っている。彼は女性の世界にみずからの自我をまき散らす。だが女性の欲望の際限なさは彼を恐怖におとし入れる。彼は女性の自然な欲望のうちに悪の萌芽を見出し、性的欲望を破壊の欲望と結びつける。恋愛はボードレールにとって外科手術あるいは決闘のようなものとなる。彼はそこでみずからの実質を失う恐怖を味わう。ダンディとしてかれは自分の自我を集中させようと努める。女性の肉体の挑発的な現前を和らげるために、ボードレールは女性を宝石類や風景によって縁どろうとする。あるいは女性の現前を思い出あるいは霊的な存在へと昇華する。しかしボードレールは女性の世界において恍惚と恐怖の間を揺れ動くことを決してやめはしないのである。

キーワード： ボードレール、女性の世界、自然な欲望、恍惚、恐怖、分散する自我、自我の集中

